



Title	ポル・ボウでの犯罪 ファン・ゴイティソロ
Author(s)	園田, 尚弘
Citation	長崎大学教養部紀要. 人文科学篇. 1994, 34(2), p.147-150
Issue Date	1994-01-31
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10069/15336">http://hdl.handle.net/10069/15336</a>
Right	

This document is downloaded at: 2019-04-19T02:39:54Z

## ポル・ボウでの犯罪

ファン・ゴイティソロ

園 田 尚 弘 訳

マチャードの遺骸が眠っているコリウールの墓地からほんの数キロメートル離れたスペイン側国境に、もうひとつの、これよりはるかに有名でない墓地がある。ハンナ・アーレントはその墓地について次のように述べている。「直接、地中海につながる入江に面して、岩肌をむきだしにして、テラス状の階段になって、その墓地は下ってきている。その岩の壁には壁龕が作られている。それは実際、私がこれまで訪れた場所のなかでもっとも風変りな、美しい場所のひとつである。」

このように描かれている墓地はポル・ボウのそれである。このユダヤ人の有名な著作家は1941年にここでヴァルター・ベンヤミンの墓を探したが、その探索は無駄に終わった。ベンヤミンが死亡時に身に着けていた70ドルが医者への謝金になり、埋葬費用も、5年間の壁龕取得費用も払われたにもかかわらず、ベンヤミンの友人は墓地のどこにも、ベンヤミンの墓のしるしを見つけることができなかった。戦後、『ベルリンの幼年時代』の作者が深い忘却から呼び起こされたあとになって、木の柵でかこまれたひとつの不思議な墓があらわれた。そこにはベンヤミンの名がなぐり書きしてあった。ゲルショム・ショレムによれば、これは墓地の監視人によるまったくのねつ造であるということである。つまり彼らは、ベンヤミンを讃美する外国からの訪問者に詳細をたずねられて、チップに応えるために、この戦略に出たのであった。いたずらと犯罪がしばしば入れ替るスペインの典型的な現実である。

私が知っているかぎり、私たちのうちの誰ひとりとして、そして歴史的ファシスト党が権力に近づいてからでさえ、事実を決定的に明らかにしようと努力したものはいなかったし、犠牲者にふさわしいつぐないを明確化しようとしたものもいなかった。死体の発掘と遺骨の移転というスペイン的ペてんにおいて—善人アントニオ・マチャードのケースで死体愛好の欲望を満足させることには失敗したが—ベンヤミンの死体と遺留品の二重の手品は、少なくとも奇怪に見える。私たちの文化上の指導者の伝統的無知も、ドイツの思想家の作品と生涯が大衆に知られていないこともこの無頓着と沈黙を正当化しない。結局のところ、グラナダで起こったことのはっきりしていない犯罪についてのスペインの責任はただたんにそれを許したものだけにかかわりがあるだけではない。というのもそれはわれわれすべてに知れわたっているからである。ベン

ヤミンの作品はヨーロッパ文化の共通の遺産である。そして私に関係することでは、ベンヤミンの作品は、イベリア半島の作家の大多数の作品よりも直接的だと思う。

哲学者でエッセイストで旅行家のベンヤミンは何にもまして比べるものがない記憶の地図の作り手、都市の景観の繊細な探究者、近代化に関する鋭い、好奇心に富んだ大家であった。彼の幼年時代の素晴らしい描写、大都市への感激、ボードレールを追ってのバリ逍遙、歴史と芸術についての深い省察が豊かで広大な彼固有の領域をなしている。今日の読者は、密猟者の秘かな緊張と喜びをもってそこから何かを奪うのである。信念も幻想も持たないマルクス主義者であるベンヤミンは、赤で、ユダヤ人という二重の理由で彼の国を追放され、不安な放浪の生活に定められ、共和国のスペインに一時的避難所を見つけだした。そしてイビザでの滞在について鋭い誠実なページを書き残した。ベンヤミンを再読するたびに、私は、「私たちに許されたのとちがった運命」の兆しを明らかにする沈黙の合間に、彼が唯一の方向の予感を、あるいは冷酷にも彼の同国人の狂信と野蛮が彼に押しつけた運命へ至る袋小路の予感をもったかどうか自問してみた。彼を苦しめていた破局—世界戦争、ナチスのフランス侵入、脱出とマルセイユへの一時的避難—に居合わせた彼の友人たちのたくさんの証言は一同僚のアドルノがしたように、まだ可能だった米国への脱出する好機をあきらめたすばらしい、ペシミスティックなひとりの男を、抵抗力の減少に悩んでいるように見え、不吉な焦慮すべき大事件に直面している男を、わたくしたちに教えている。

ショレムやティーデマンのベンヤミンに関する本に掲載されたりサ・フィットッコ、グレーテ・フロイントやアルカディ・グーラントの妻の手紙や詳細な話のおかげで、私たちは、ベンヤミンの足跡を、いやむしろ十字架への道を、無国籍の少人数のグループとともにポール・ヴァンドルへ着いたときから、1940年9月26日の残酷な夜までの道程を一步、一步再構成できる。この日彼は、わなにはまって、警察によって連行されていたポール・ボウのホテルで自殺したのであった。スペイン側の細道を教えてくれるガイドを求めての焦慮にみちた待機、バンユールの市長の親切な援助、原稿の入った黒いカバンを持ってのセルベールまでの歩行、出発前日の教えられた道の事前調査、他の者と村へ帰り、夜明けに歩くかわりに、山中で原稿をもって夜を明かそうという突然の決心、溢れる光をあびての、赤いブドウ園を通過しての一行の苦しい登り、心臓病のため限界に近いほど疲れたベンヤミン、ゲシュタポの手から原稿を守るための不安、ポール・ボウを目の前にした時の亡命者たちの大きな喜び。

そこで彼らを待ちうけていたものについては、ドラマに居合わせていた二人の証人によって細かに叙述されている。「ポール・ボウのスペイン側国境で私たちは、入国スタンプの義務的手続きをはたすために直接、警察にいった。しかし私たちが、正規の旅行の書類とスペインの通過ビザをもっていたにもかかわらず、彼らは断固としてそ

れを拒否した。警察署長は、書類が国籍不定、あるいは無国籍となっているものには、スペイン領に入ることを禁ずる旨のマドリッドからの新しい訓令があったと、主張した。署長は、私たちが来たところへ戻るようにと言った。もし命令に従わなければ、ドイツの当局に引き渡すためにフィゲラスの収容所へ連れてゆくと言った。」(グレーテ・フロイント、1940年10月9日の葉書)「1時間のあいだ、私たち3人と他の4人の女性は絶望しながら、泣きながら、わたしたちの正規の書類を示しながら、役人たちに嘆願しながら、すわっていました。わたしたちはホテルでその夜を過ごすことが許されました。そして、翌日わたしたちを国境まで連れていくことになっている3人の警察官にひきあわされました。… ベンヤミンにとっては、フランスへもどることは収容所行きを意味していました。… 朝7時に、リップマン夫人がわたしに、ベンヤミンが私と話をしたがっていると伝えてくれました。ベンヤミンはわたしに言いました。昨夜10時に大量のモルヒネを飲んだが、病気にみせかけてほしいと。彼はわたしとアドルノに手紙を渡しました。その後、彼は意識を失いました。わたしは医者呼びましたが、医者は、もう危篤状態だといって、彼をフィゲラスの病院へ運ぶ責任をとろうとしませんでした。その日の残りの時間は警察や町長や判事のところを廻されました。彼らはベンヤミンの書類を調べ、そのなかにスペインのドミニコ会のひとたちにあてた一通の手紙を見つけた。」(グルラント夫人、1940年10月11日消印)『パリ、19世紀の首都』の作者の自殺は彼の連れのものたちの生命を救った。彼らにとってやっかいなドラマに困惑し、またうんざりさせられて、フランコ主義者たちは、一行に旅行を続けることを許可したのだから。

この国境の不幸な場所でおこった自殺の残忍さを思うと、一連の疑問を提出せざるをえない。ベンヤミンの追放を決定した警察官は誰か？ 医者の検死はどのような表現になっているのか？ 警察官が書いた書類の内容はどのようなものか？ 州の文書館にはあれこれの記録が残っているのか？ どうみても不名誉の世界史に残るにあたいするひとびとの名と姓を記憶のために知る方法はないのか？

ベンヤミンが命を賭して守っていた原稿は、彼の残りの所持品とともに失くなってしまった。そして誰もその行方を知らない。ゲシュタポの手に渡され、無に帰してしまっただのか、それとも警察の手に残っているのか？ その貴重さのゆえにその運命をはっきりさせる厳しい調査が必要ではないだろうか？ それらのものがいつか明らかにされるわずかな可能性といったものがあるだろうか？ これらの問いに対する答えを待ちつつ、私はもっとはっきりした重要な問いかけを試みよう。ポル・ボウの海辺の美しい墓地、これは読者をあざ笑うために、そして墓堀り人夫のもうけのために、にせの墓をさらしつづけるのか？ ドイツとスペインの民主的な諸機関は、ヒトラーとフランコの二重の犠牲者に道徳的つぐないをしなければならぬのではなからうか？ おそら

くベンヤミンが眠っている共同の墓地でおこった事実を短く説明する簡素な石碑は、ベンヤミンのよりよい記念であるのではないだろうか？彼の豊かな、刺激的な思考は、犯罪から44年たった今日われわれの時代の偉大な作品の印しをおび続けているのである。

#### 附記

これはスペインの日刊紙『エル・pais』の1984年8月5日づけの記事の翻訳である。フランスやイタリアと比べて、ベンヤミンの受容において遅れをとっていたスペインで、ベンヤミンとスペインの関わり、ベンヤミンの死にまつわるスペインの責任を指摘した早い時期での記事である。ハンス・マイヤーは『同時代者、ベンヤミン』（1992・フランクフルト・アム・マイン）で『エル・pais』がベンヤミンの没後50年目にあたる1990年9月26日にベンヤミンの特集を組んだ事実をもって、ベンヤミンの文化批評家としての意味が増大した証拠とみなしている。そこに掲載されている記事はルイス・マエナスの「知識人はボル・ボウでの自殺50周年にヴァルター・ベンヤミンを回想している」、ホセ・ミゲル・マリナス「都市のなかのベンヤミン」、さらにアレフレッド・アンデルシュがベンヤミンに献じた詩のスペイン語訳、等である。マイヤーの文章に刺激されて、スペインにおけるベンヤミン受容を調べてみようと思いたって、まず最初に翻訳したのが、ゴイティソロの文章である。もうかれこれ10年近く前に書かれたものだが、ボル・ボウに記念碑を建てようとする主張している点に注目したい。この主張はイスラエルの建築家ダニ・カラバンの記念広場の計画につながるものだろう。1992年6月に行なわれた国際ベンヤミン会議では、ほぼできあがった記念碑への援助をドイツ政府が出し渋っている事態に抗議声明が発表されたという。（ドイツ文学、1993年、春号）

記事の入手にあたっては、マドリッド在住の美術批評家、タケシ・モチズキ氏の助力を得た。心から感謝の意を表します。

(1993年7月23日受理)